



巻 頭 言

光 技 術 の 連 帯

辻 内 順 平*

レーザーの出現により、それまで実験室に止まっていた光学技術が現場に進出し、多くの新しい実用技術が誕生した。干渉や回折を中心とする光計測は、そのなかでも一きわ目立った存在である。同時に、光通信、レーザー加工、レーザー医学、レーザー核融合等のまったく新しい技術も現われ、むしろこれらの新しい技術のほうが一大産業に発展する勢いを示している。

かつて光学は物理学の花形であったが、いまや技術の花形として、あらゆる分野にその応用が伸びている。これらをそのまま放置しておけば、光学はそれぞれの応用分野に分断され、今後の大きな発展はむずかしくなるのではないかと懸念される。光技術者はつねに光学の原点に立ち戻り、基礎概念から出発してこそ次の新しい発想が生まれ、今後の飛躍が期待できる。この光技術の連帯は、国際的には ICO（国際光学委員会）が果たそうとしているが、国内では光学懇話会に期待したい。

光学懇話会は、もともと光学の学界と産業界を結ぶ“懇話会”として発足したが、今度はこれらの新しい光技術分野の連帯をとりもつ“懇和会”の役割を果たすべきではなからうか。一方では、光学懇話会の将来計画の議論も賑やかであるが、まずは実績作りが大切である。応用物理学会の春秋の講演会がいまやパンク状態に近く、関係者は頭を痛めているが、一つ広い意味の光関係の分野だけを分離して、独立の講演会を提案し、“光関係連合講演会”でも実行に移して見るのも連帯の第一歩として面白いかもしれない。

最近、アメリカの学会である SPIE が、ヨーロッパで講演会を開くようになり、その攻勢にヨーロッパの光学関係学会は危機を感じているという声を聞いた。SPIE のきめ細かい産業界向けの対応は、アカデミズム中心のヨーロッパの学会にとって新しい脅威となり、その対策に苦慮しているようである。光学懇話会は、すでに 30 年以上も前にそのことに気付き、実行に移したという実績をもっているが、いまや新たな対応を考えるべきときに立ち至っている。30 年とはいわないが、せめて 10 年くらい先を見通した先見をもう一度発揮してはどうだろうか。